

分考通信

第十三号
2018年3月号
その1
文責
中伸一



八幡小の収穫祭へ

2月15日(木)、八幡小学校で開かれた「収穫祭」に1年生3人が招待され、参加してきました。

収穫祭は、八幡小学校の3・4年生が1年間総合学習の時間で学習してきた「米作り」についての学習の成果を、関係する人たちに発表する場です。

本校の生徒も、あらぎ島での田植え・稲刈り体験のお手伝いをしたこともあり、今回の収穫祭に招待していただき参加しました。地域の方も4名参加されてきました。

収穫祭では、小学生が1年間米作りについて体験したことや学んだことの報告だけでなく、「米を食べる人が減っているのではないか?」という疑問から、さらに詳しく調べたことも発表してくれました。

また発表の中では、自分たちで八幡小学校の児童や先生方にとって「朝食に何を食べるか?」というアンケートの結果や、全国の米を用いた料理に関するクイズなど、パワーポイントを効果的に使いながら、上手に発表してくれました。「八幡の祭りの歌」も披露してくれ、小学生とは思えない、堂々とした態度での発表に驚くとともに、小学生の思いも感じ取ることができました。



そして、収穫祭の最後には会食があり、小学生が握った山椒入り炊き込みご飯のおにぎりと、お味噌汁を準備してくれていました。おにぎりは山椒の風味がほどよくして、このような使い方もあるのかと思いつきながら、おいしくいただきました。小学生と談笑しながら楽しい時間を過ごすことができました。普段はなかなか小学生と交流する機会のない高校生にとっても、貴重な経験になったようでした。

また、地域の方も参加されていたことから、清水地区にとって「米作り」や「あらぎ島」がどれほど大切かということ改めて感じることができました。



農山村の未来を考える

2月18日(日)清水文化センターで開かれた、「有田川町創世シンポジウム」に参加してきました。大勢の地域の方も参加されており、私が着いたときには文化センターの駐車場に車を停められないほどでした。シンポジウムは、第一部と第二部に分かれて開催されました。

第一部では、「株式会社自遊人 代表取締役」の岩佐十良氏による、基調講演がありました。岩佐氏は、クリエイティブディレクターとして、2000年に雑誌「自遊人」を創刊されました。2004年には、米作りに関心をもち、拠点を新潟県魚沼市に移します。そこでオープンした「里山十帖」では、グッドデザイン賞BEST100を受賞するなど高い評価を受けています。宿泊の予約もなかなか取れないほど、多くの人がその地を訪れているそうです。

その要因として、「地元の食材にこだわったまちおこし」をテーマにした、米をメインディッシュに用いた料理や、様々な農業体験ができることなどがあげられています。また、インターネット・スマートフォン の普及により、共感の連鎖により活発になり、そのことも多くの人が訪れるきっかけのひとつにもなっているとのことでした。

私が印象に残っている言葉は、雑誌自遊人のタイトルにあった「わざわざ行きたくなる」という言葉です。観光に来てもらう、移住してきてもらうためにはどうすればいいのか、伝えたい魅力は何なのか、ということ突き詰めていくことが、まちおこしにおいて大切なことになってくるのではないかと感じました。

山椒の新たな可能性

第二部では、パネルディスカッションが開かれ、先ほどの岩佐氏の司会のもと、5名のパネラーの方々が、意見を交わしていました。地元清水地区の山椒に大きく関わっている方からは、山椒の現状として、需要が8割あるのに対し供給が9割と、供給が追いついていないことや、山椒農家の減少・高齢化問題ということがあげられました。

そんな中、清水地区の山椒を様々な形で料理に生かされている料理人の方からは、新しい山椒の使い道として、山椒オイルの普及の話や、普段は捨てられている秋の山椒が実は料理には有効的に使われることもあるという話など、山椒の可能性が広がる話がなされていました。

やはり課題としてあげられたのは、人手不足でした。みかんと同等の収益性があるにもかかわらず、山椒の価格を考えると、山椒だけでは生活できないということも現状として述べられていました。深刻化している高齢者問題を解消していくためにも、清水地区に来てもらって実際に体験・交流することを通して山椒の魅力を広く伝えていくことが、今後大切になってくるということも話し合われていました。

今回のシンポジウムを通して、山椒の魅力を改めて感じたとともに、多くの地域の方が集まってくれていたことから、みなさんが地元の課題として認識し関心を持っているということを強く感じました。

中野 友貴

